

## 住居の空間構成に関する研究

——単位空間の両義性について——

佐々野 好 継

長崎大学教育学部住居学教室

(平成10年3月13日受理)

## A study on the spatial structure of house

——about a ambiguity of spatial unit——

Yoshitsugu SASANO

Department of Housing science, Faculty of Education,

Nagasaki University, Nagasaki 852-8521, Japan

(Received March 13, 1998)

### Abstract

Purpose of this paper is making it clear that there are three constitution units in the middle of unit of space that is constituted of house space, and extracts elements of constitution respectively.

It means a new proposal planning method on house planning by application of nothingness-space, including the recognition of space on modern house planning that whole house space is constituted of the couple of parts-unit-space.

The finding are as follows.

1. three constitution units on spatial structure of house:(1) whole-unit-space (abstract space). (2) combination-unit-space (3) parts-unit-space (entity-space).
2. three constitution elements of house space:(1) void. (2) space-room. void-space. void-room. (3) space. room.

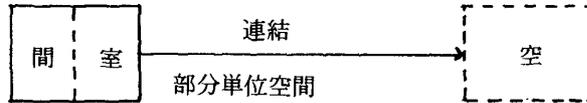
House planning is expressed by combination of space element.

### 緒 言

住居の空間構成における設計手法は、いわゆる部分単位空間の構成要素である間と室との連結関係で住居の空間が構成されるという立場からの連結的手法と、全体単位空間(像)の構成要素である空を分割して住居の空間が構成されるという分割的手法の二つに大別されるというのが、一般的なこれまでの見解である。

## 分析方法1-1：間と室の二元論の立場

(N-タイプ) (部分から全体へ)



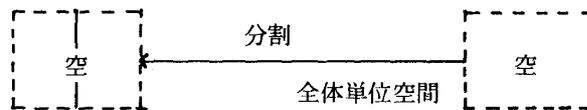
実在する空間 (部屋)

問題点：相互依存の空間が表現できない。



## 分析方法1-2：空の立場 (一元論)

(全体から部分へ)

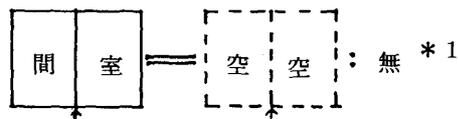


抽象的空間

問題点：相互限定の空間が表現できない。

## 分析方法2：無の立場 (無部屋構成論)

(B-タイプ) (対立する命題の克服)



=相互作用を表す

: 即ちを表す



図1 住空間の認識と構成要素 (概念図)

\* 1 無：間，室，そして空の総合概念が，無である。

(間と室は反対語。空は，間と室の複合語である。)

しかし、本質的には、住居の空間は、間、室、そして空の総合概念である無\*1の空間で構成されているという空間認識の立場から、判断・適用すべき内容である (図1)。

なぜならば、従来からの機能主義の立場では、住居の空間構成における全体と部分の組み合わせ単位空間 (: 部屋。空き間。空室。) の実在が把握されないし、それらの空間を実際の計画・設計手法として生かされないからである。

本論文は、この組み合わせ空間の重要性を指摘すると共に、状況に応じては適用するための、新たな空間概念の視点から住居の空間構成における連結的手法の空間分析図 (広義の機能図) を提案し、今後の住居の計画・設計に役立てようとするものである。

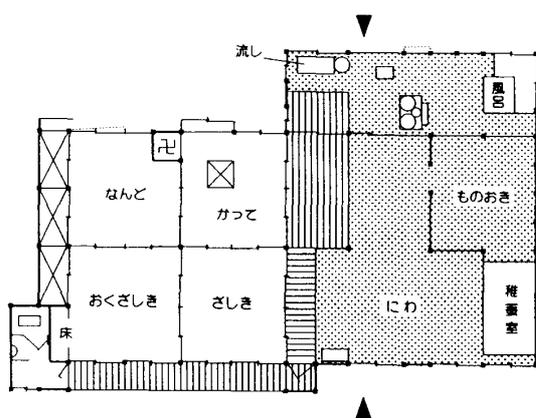
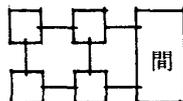
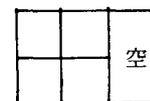


図2 四つ間取り田の字型

狭義の単位空間の認識からの空間分析図



連結的手法 (計画)  
図2-1 四つ間取り



分割的手法 (歴史)  
図2-2 田の字型

広義の単位空間の認識からの分析図



図2-3-1 (組み合わせ単位空間)

図2-3-2

図2-3 新しい手法

1. 連結的手法と分割的手法

図2は、いわゆる四つ間取り田の字型の住居である。すなわち、この住居の空間は、まず床上部分と土間部分で分割されており、その上で床上部分は四つ間で構成されていると一般的には説明される、伝統的な農村住居の典型的なタイプである。

これを、連結的手法で分析すると、図2-1として図式化される。また、分割的手法では、図2-2である。

この連結的手法では、四つ間が建具をはずすと一間になるという相互依存の空間が表現されず、また、分割的手法では、逆に、床上部分の相互限定の空間の使われかたが表現できない。

そこで、これらを統一した図式が図2-3である。この図では、土間部分の空と床上部分の一間が相互限定の空間であることが、まず、図2-3-1でわかる。そして、その床上部分の中での相互依存の空間としての四つ間がある(図2-3-2)。すなわち、この図式では、床上部分の空間は、相互依存と相互限定の同時空間(四(∨)間取り+空)であり、また、そのことは、土間部分の空の存在が、それを、可能にしている。

このように、図2-3は、連結的手法と分割的手法とを統一した図式である。

2. 住居の空間構成に関する用語の定義

(1)-1: 構成単位空間に関する用語——出入口の機能を重視

- 1) 部分単位空間: 住居の空間を出入口の機能の視点から、分析する際の、生活上の最小単位空間を言う。従来の機能図はこの部分単位空間の連結で、住居の空間構成の分析図を表現している(図6-2)。
- 2) 全体単位空間: 住居空間の平面図そのものを、一つの単位空間として認識・把握する際の抽象的・無形の空間のことである。
- 3) 組み合わせ単位空間: 部分単位空間と全体単位空間との組み合わせによる単位空間のことである。

(1)-2: 構成単位空間に関する用語——出入口の機能を無視

- 0) 単位空間: 住居空間の出入口の機能を無視しての平面図全体の中のそれぞれの空間を言う。

## (2) 1 : 構成要素に関する用語 (図3)

## 部分単位空間の構成要素

- 1) 間：少なくとも二つの入り口がある二重——浸透の实在を間と定義する（なお、間は、自己言及的で内因的である。このことは、間の中に室が含まれていることを意味する。）
- 2) 室：室は、ある明確な領域の閉鎖によって認識されるという間の属性である。すなわち、外因的である。故に、定義しない。

## 全体単位空間の構成要素

- 3) 空：空には、空そのものの領域はない。隣接する实在によって定義される。出入口の数は、ゼロであり、また、間でもなく室でもない空が、その意味である。

## 3. 既往研究との対応 (図4)

住居の空間構成における単位空間には、両義性がある。すなわち、広義と狭義の二つの意味である。

従来の機能論の立場からの住居設計における連結的手法は、単位空間を狭義の部分単位空間の連結関係として解釈し、認識してきている。

これに対して、単位空間を広義の意味で解釈し展開するのが、本論の立場である。尚、広義の意味で展開していると思われる空間概念のキー・ワードには、原広司氏の〈非ず非ず〉の論理、鈴木成文氏の〈領域論〉、そして東孝光氏の〈スリット〉空間などがある。

これらの研究は、本研究の〈無〉の論理に、重要な示唆を与えてくれている。

また、外国では、ビル・ヒラー氏の研究がある。ヒラー氏の研究は、住居の空間配置におけるシステム分析の視点から重要な示唆を与えてくれる。

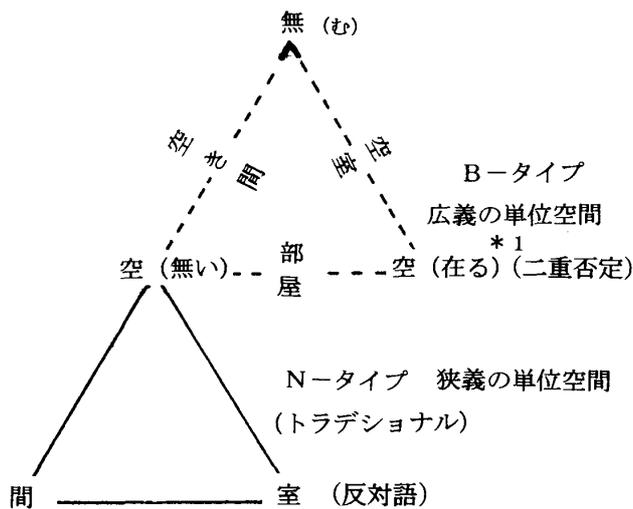


図4 単位空間の両義性とタイプ

参照 1) 広義の単位空間：図6—3および図1

2) 狭義の単位空間：間——室

\*1：無いことは無い——二重否定——の在る，である。

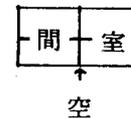


図3 住空間の構成要素

注) 図1参照

## 素材および方法

### 1. 素 材

図5の平面図は、近代建築の合理性・機能性に対応するプランとして1950年代頃から、デザインされてきた二つの独立した室とLDKの間で構成されている平面構成という意味で2LDKと一般的に呼ばれるプランである。

このプランの特徴は、まず、和室とLDKの仕切りが引き戸であるのに対して、残りの部分単位空間の出入り口は、全て開き戸という点である。

また、浴室とトイレが、別々の空間で配置されているのは日本的なプランである。

そして、浴室と洗面所は、全体空間の長方形を2分割した、同じ規則的な長方形の部分空間で構成されているという二重の組み合わせ空間を特徴にしている。しかし、これに対して、洋風のLDK空間は、不規則なはっきりした空間である。

このように、図5は、住居空間の両義性の問題を展開する上で興味あるプランである。

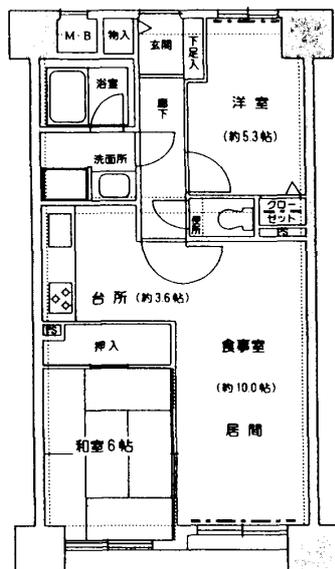


図5 2LDKの平面図

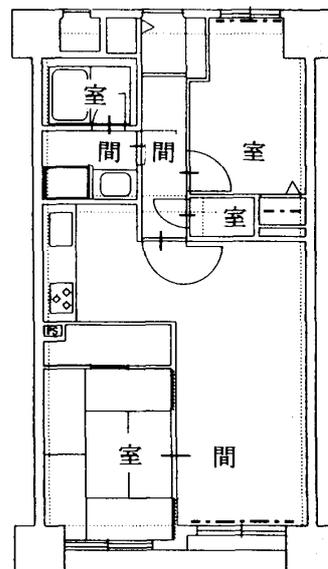


図6 部分単位空間の構成要素

### 2. 方 法

#### (1) 分析1—はじめに

住居の空間を構成している単位空間と単位空間との間にある出入りの機能に注目する(ただし、外部空間と接する玄関・ベランダ等については、対象にしない)。そして、一つの単位空間と反対の単位空間との間にある出入りの機能を直線で表現する。住居の部分単位空間は、少なくとも二つの入り口がある間と、間の属性である室との構成要素で分類されていることがわかる(図6)。

次に、住居空間の構造を明らかにするために、各々の部分単位空間を切り抜いて分解してみる(図6—1。)

図6—1によって、住居の空間は、本質的には部分単位空間と全体単位空間との同時存在の二重構造で構成されていることがわかる。

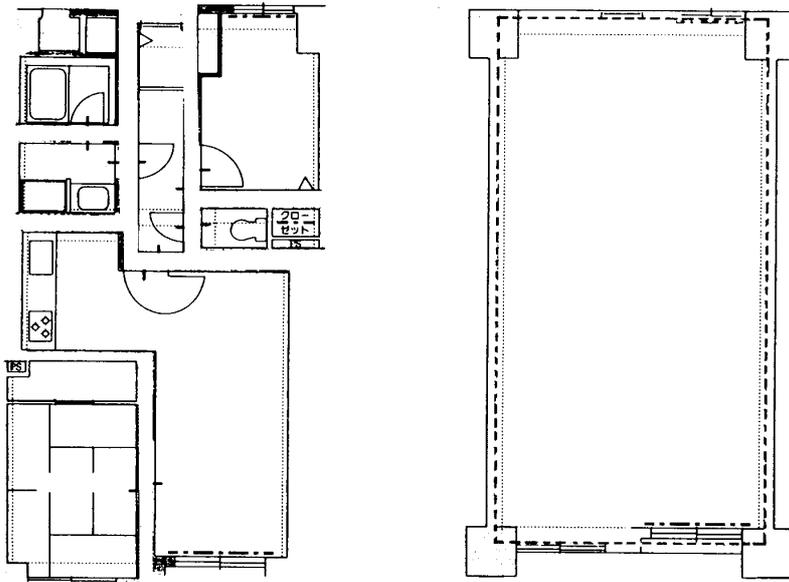


図6-1 住居空間の分析

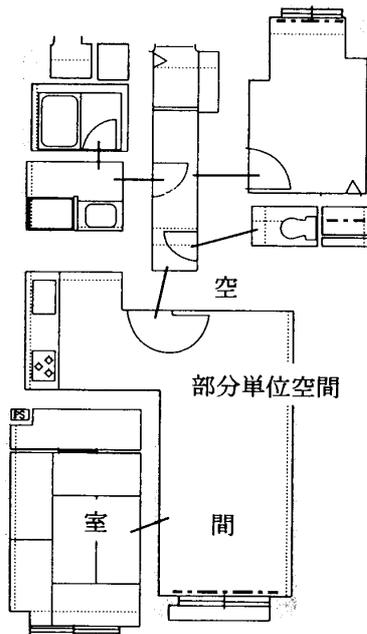


図6-2 空間分析の機能図

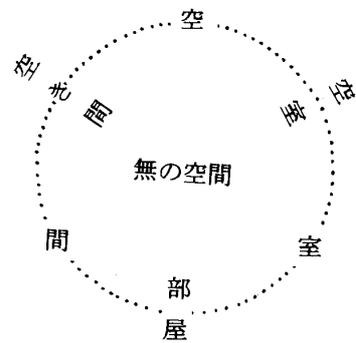


図6-3 無の空間の構成要素

そして、全体単位空間の構成要素を、出入り口の数がゼロの空と定義する。

(2) 分析1—狭義の機能図 (N—タイプ)

この全体単位空間の空を実体として固定的に把握するのではなく、機能で表現する。

従来の建築計画学の立場からの、狭義の機能図が作成される (図6-2)。

そして、部分単位空間相互の間にある直線が、全体単位空間の空である。

## (1) 分析2—はじめに

ここでは、全体単位空間の構成要素である空を、部分単位空間の間と室だけではなく、同時に表現・生かす方法を考えてみる。

ただし、組み合わせ単位空間が、この分析方法によって生成しなければ、この分析は無意味であり、従来のN-タイプに還元される。

すなわち、住居の空間は、部分単位空間の構成要素である間と室、そして全体単位空間の空との総合概念である無の空間で構成されているという空間認識の立場からの分析である(図6-3)。

## (2) 分析2—広義の機能図(B-タイプ)(図6-4)

まず、隣接する実在の空間(生活空間)によって囲まれた出入り・通行のために空いている廊下部分を全体単位空間の空として要請・位置付ける。

部分単位空間相互の限定と依存が、この空の働きによって作動し、無の組み合わせ単位空間の生成と二つの部分単位空間に分割される。なお、無の組み合わせ単位空間は、着衣・脱衣=入浴、団欒・食事=就寝という相互作用の生活空間であるので、組み合わせ単位空間の構成要素の中で、これを、部屋と指定する。また、二つの部分単位空間の構成要素は、間の属性である室である。

そして、各々の単位空間を結ぶ直線を、中線と呼ぶ。

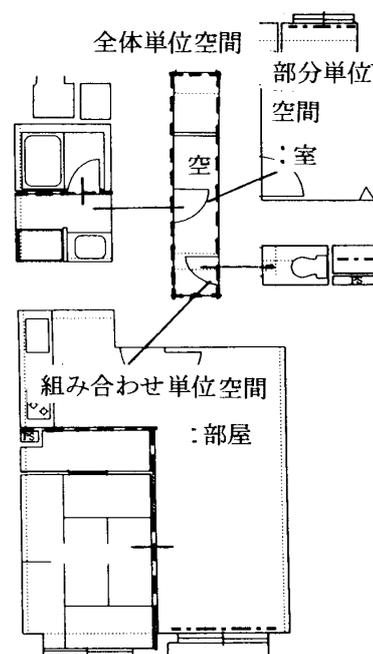


図6-4 住居の空間分析における広義の機能図

## 二つの分析結果とBタイプの有効性

住居の空間を構成している単位空間についての狭義の解釈では、相互に独立した間と室との構成要素で、住居の空間が構成されているという空間認識であることは、すでに述べた。

そこで、まず、そのN-タイプの空間把握の視点から図6を分析してみる(図6-2)。

相互に独立した二つの室とLDKで構成されている住居空間の狭義の機能図として分析される。すなわち、2LDKのプランである。

これは、狭義の単位空間の視点では正しい。

しかし、この空間記号の表現では、通路から直接、出入りすることができる洋室とLDKを間接的に通過する必要がある和室との空間の性格の違いが表現できない。すなわち、相互に限定し合う空間(1(LDK), 1)と相互に依存し合う空間(1・LDK)の表記の区別ができないのである。

そこで、広義の単位空間の視点からの解釈を試みる。〈平面図全体の単位空間が空である〉という抽象的空間を、隣接する領域で囲まれた廊下空間に要請・指示してみる。無限定の空間である平面が、作動し、限定された組み合わせ単位空間(1・LDK)が生成し、同時に、又、部分単位空間が分割される。

故に、この広義の機能図では、廊下部分の空を媒介(+ )としての1LDK+1として

整理される (図6-4)。

ここに、広義の解釈の有効性がある。

## 考 察

住居の空間を構成している全体単位空間は、出入り口の数がゼロの空である。

この抽象的・無形の空間である空の存在を、あくまでも機能のレベルにおいてのみしか考えないとするならば、図6は、従来どおりの2LDKとして整理される (図6-2)。

しかし、全体単位空間の空の存在を、廊下空間に見るならば、相互依存 (1・LDK) と相互限定 (1 (LDK), 1) によって存在する空の介在 (+) で2LDKは、1LDK+1 と変換できる。

## 結 論

1) 住居の空間は、間、室、そして空の総合概念である無の空間で構成されていることを明らかにした (図6-3)。

そして、無の空間の構成単位は、3つのカテゴリーで分類される。すなわち、(1)全体単位空間。(2)組み合わせ単位空間。(3)部分単位空間の3つのカテゴリーである。また、それらの構成要素は(1)空。(2)部屋。空き間。空室。(3)間。室である。

2) 無の論理の立場では、住居の空間は二つのタイプで整理される。すなわち、NタイプとBタイプである (図-4)。

そして、このタイプの差異は、組み合わせ単位空間の有無にある。故に、図-5は、NタイプよりむしろBタイプとして整理される (図6-4)。

## 謝 辞

本論文をまとめるにあたり、草稿の段階から、ロンドン大学建築環境学部バートレット大学院、ジュリーネ・ハンセン博士の御指導を受けることができました。紙面をお借りして、謝意を表します。また、教育学部住居学教室のゼミナールの学生である東香織さん、古川裕美さん、松田みゆきさん、宮本優樹さん、本岡真紀子さん、そして山田茜さんには、いろいろとご意見を頂きました。あわせて、謝意を表します。

## 文 献

- (1) Bill Hillier and Julienne Hanson: The social logic of space, Cambridge University Press, 1984
- (2) Bill Hillier : Space is the Machine : A configurational theory of architecture, Cambridge University Press, 1996
- (3) 東 孝光: 都市住居の空間構成, 鹿島出版会, 1986
- (4) 原 広司: 空間<機能から様相へ>, 岩波書店, 1988
- (5) 鈴木成文: 住まいの計画・住まいの文化, 彰国社, 1988
- (6) 新建築学大系編集委員会編: 新建築学大系23, 建築計画, 彰国社, 1992